



【教育育成部会】

- ・安全な登下校の見守り
 - ・学習環境の整備
 - ・避難所としての役割検証
 - ・地域と学校との連携
- 「本荘っ子」の健全育成支援に取り組む。

【広報部会】

地域情報や健康についての関係機関からのアドバイスが自粛期間中は届かない。そこで、期間限定新規情報紙「サロン通信」を発行して、注意事項を伝えるようにした。

【福祉健康部会】

地域サロンを核に地域高齢者同士のご縁作りに取り組む。約3年間のコロナ禍での活動中止期間で、QOLに大きな変化が生まれている。感染対策に配慮してもう少しばらく参加者の見守りを続ける。

カゴメベジチェック



目先を変えた健康チェック。情報発信でQOL向上に貢献

【地域振興部会】

各種団体が企画した事業をより多くの住民に周知するようコーディネータ役として《繋げる》→《繋がる》策を一緒に考えて広報部会と協力してPRに努める。

傾聴と共感で繋がる地域活動「第13章」

本荘まちづくり協議会活動紹介

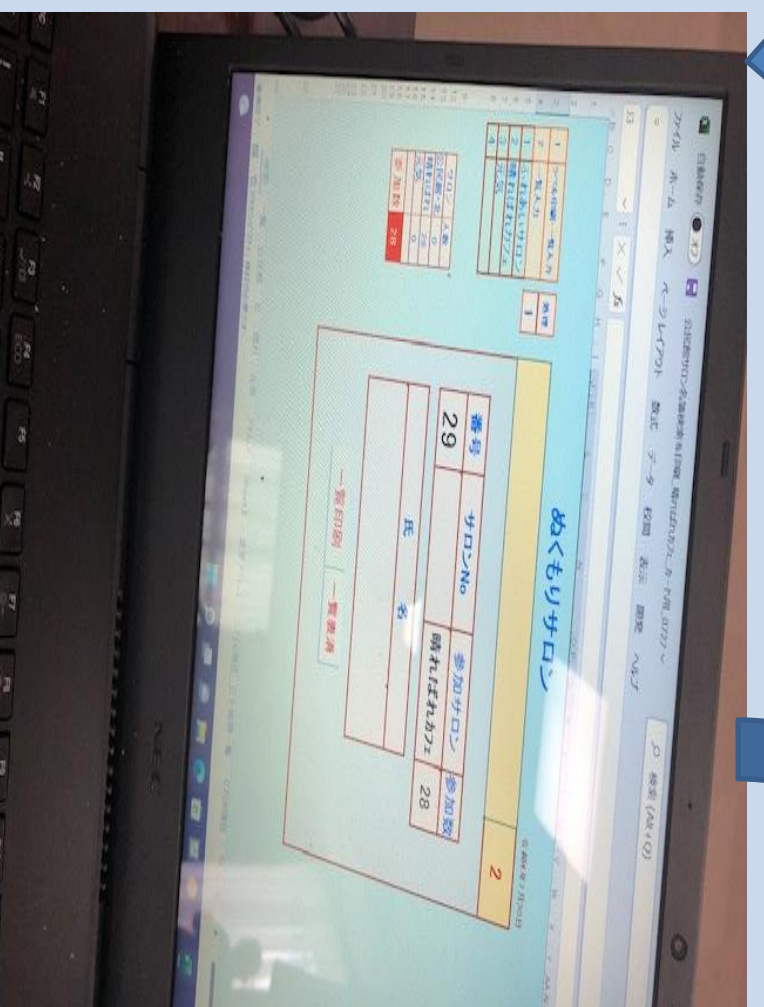
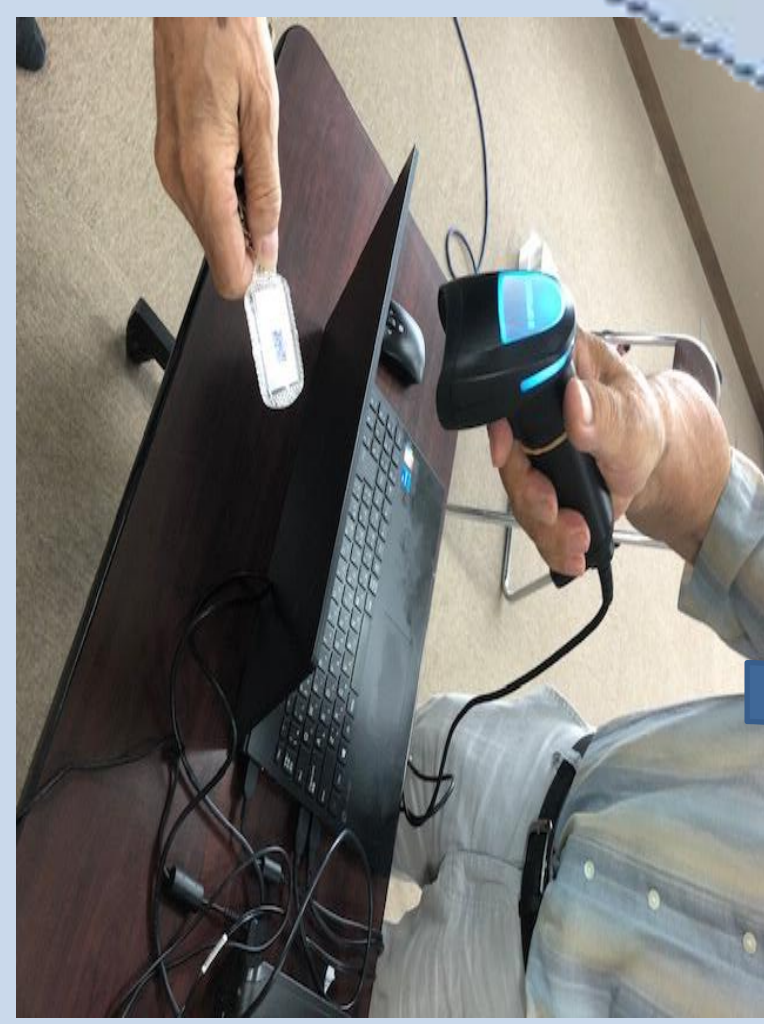
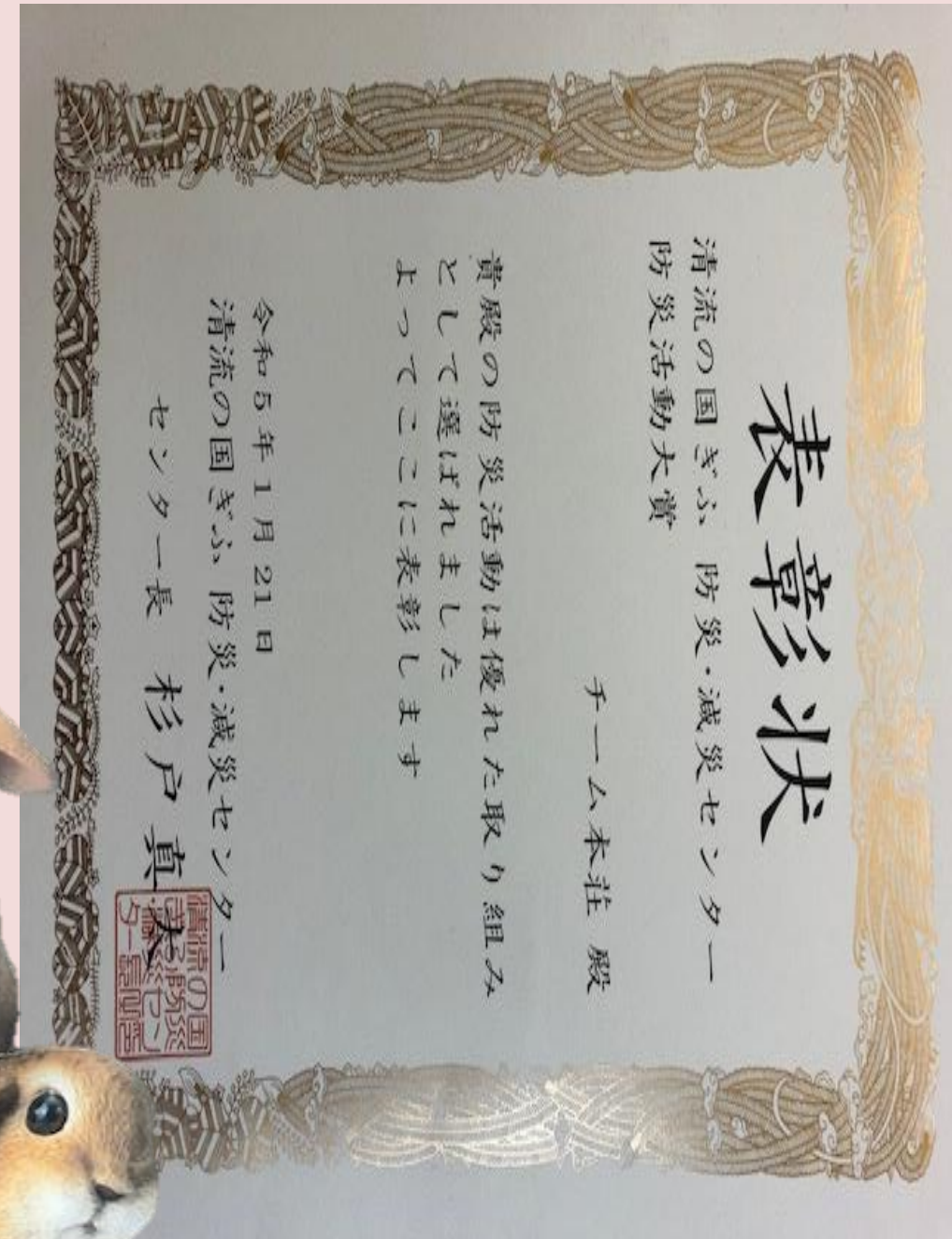
【情報管理部会】

人の動きを見える化する。サロンの参加者動向を読み取る（QR）ことを続けることで、避難所での人流把握が迅速にできる。チームラインを運用することで、情報の共有化が瞬時に可能となる。

【安全部会】

避難した体育館で情報がないまま待機する「避難者」から、外の避難所からの救助要請・仲間の避難状況・大規模災害団員から救助援助依頼に適応できる人材育成に取り組む。

「第4回防災活動大賞」【防災活動大賞】受賞



ご挨拶です。

衣食住遊
TEAM Honjo
Love it

チーム本荘		震災の備えと防災・減災センター 第4回 防災活動大賞	応募作品【6】		
助けられる側から助ける側へ 「第4章」					
【活動内容の特徴】		【団体の紹介】			
中学校の災害時の役割・地域連携を体験 ■災害を身近なことから考え、「傾聴と共感」を忘れず目配り、気配り、心配りのできる支援者、救助者となってもらふことを目的に行う。 ■より実践的プログラムにより、自分に出来る事を考え、気づいてもらう。		チーム本荘 ・令和元年4月～現在（約4年） ・本荘中学校2年生 150名 ・岐阜市民病院DMAT、地域協力企業 岐阜市関係部署職員、地域防災チーム 大規模災害団員、近隣自治会連合会			
【アピールしたい防災活動の成果】					
目視・行動することで「助ける側へ」一歩踏み出す ・避難した体育館で情報がないまま待機する「避難者」から、外の避難所からの救助要請（LINE）、仲間の避難状況（QR読み込み）、大規模災害団員から救助援助依頼、DMATのトリアージ搬送等を可視化し、自分が今できることを気づき考える行動することができる。		外部情報LINE 避難状況			
【活動内容の詳細】		助けられる側から助ける側へ ・生徒協力者募集は、当日朝行う ○自分に出来る事があると気づき行動に移す生徒多数 →大人の係任者は協力者に短時間で役割を伝える ⇒災害時の的確な指示を出す（大人の訓練） ・外部避難所からの情報がわかることで受け入れや救助支援対応策が事前に取れる⇒ラインの活用 ・クラスが分散しての避難であってもQR読み込みで、素早く避難状況がわかる⇒避難者の入退出が簡単に残せる ・地域（本荘中学校+岐阜市民病院=隣接）環境を知るため、ドローンを飛ばし全員が目視で位置関係を把握し各々が気づき・行動できることを考える ・災害発生直後から活動できる機動性を備えた医療チーム（DMAT）の動きをまじかに見て、助ける側になることの必要性を直に感じ取る ・大声を出さずに人を誘導する手法（ピクトグラム看板）は、コロナ禍における避難所運営に生かされる		リャーカードの搬送 大規模災害団員と救助活動 搬送時の方路誘導 受付業務担当 岐阜市民病院へ搬送（DMAT）	
【活動成果】		＜実施者から見た効果＞ ◆「待だけ避難者」と「行動できる避難者」の差は大きなものである。中学生は大人が気づかない支援策を発案し、弱者に寄り添い安全に避難所へ誘導できた。 ◆他地域で、実績を収めている活動を学び、本活動に活かすことが出来た。 ◆中学生は防災活動の牽引役と感じた。		＜参加者等から見た効果＞ ●しっかりと考え、弱者の誘導も確に行う中学生に感心しました ●抱え込まずコミュニケーション力をフルに発揮し、最善策を考える中学生の姿勢には大人が学ばせてもらいました。 ●情報が可視化されることで、状況がわかり落ち着いて行動が出来た。	